こんなんしてます。

わだいとまわり

303

令和の米騒動

お米が消えた

お盆明けからスーパーの米売り場にお米がなくなりました。たまたまお米が切れたので買いに行ったところ、棚にはお米の代わりにパックご飯が積み上げられており、その2日後にはパックご飯も売り場から消えていました。世の中がこんな事になっていようとは迂闊でした。

お米が消えた原因は、昨年、2023年夏の記録的な猛暑による米の品質低下、訪日外国人の需要増、減反の影響などとメディアは連日話題にしていました。しかし農水省は、この6月末の民間在庫量は156万トンとここ25年間で最少だったが、米需要が年々減っている中で特に在庫が逼迫しているわけではない、もうすぐ新米が出回るので冷静に、と発表。

たしかに米の一人当たりの消費量は、1962年度をピークに減少し、ピーク時は年間118キログラムのお米を消費していましたが、2022年度は年間50・9キログラムまで減少。50キログラムをご飯で換算してみるとお茶碗約700杯。1日あたりでは外食やコンビニ弁当など中食も含め2杯弱です。自らの食生活を振り返っても納得してしまう、それほど米離れは進行しています。

「外国人観光客が連日そんなに米を食べるかあ?」と呆れ声をあげたのは友人。米不足の原因のひとつがインバウンド需要とのニュースを聞いた時です。

これには農水省の試算があって、「平均10泊した大柄な外国人観光客が1日2食お米を食べたとして米消費量は前年より約3万トン増えた」というものです。たしかにコロナ禍後、各地でオーバーツーリズム状態ですが、3万トンは米の国内消費量の0・5%未満。数字の誤差レベルだ、との見方もあります。

捨てずに食べきること

米の生産と流通はデータでの見込みとある程度調整されたしくみの中で動いています。ではどうしてはお米が消えたのでしょう。農家の減少や高齢化、米離れ、気候変動、減反政策など米づくりにおける構造的な問題はここでは別として、おもしろい調査がありました。

「米不足」をキーワードとしたウェブニュースの頻度調査によると、お盆明けの週頭から週末までの1週間で関連するTVやネットニュースでの取り上げが急増しています。スーパーの棚から米が消えたのもこの期間でした。繰り返し米不足を伝えるメディア情報に不安をもった人々がいつもより余分に米を買いに走ったのです。

たとえば車の渋滞は、事故などが原因でなくても前方の車が坂などでブレーキを踏み速度を低下させると次々と後続の車に連鎖し発生するといわれます。9月の新米が出回る前の端境期に、月に一度米を買っていた客が連日のように2袋も3袋も多めに購入すると、たちまちに仕入れと販売のバランスが崩れます。過度の備蓄は利己的な欲と紙一重の行動。「多めに買う」意識が流通渋滞を引き起こし、自分だけ手に入っても皆には届かない「米がない」騒動になったと考えられます。

もうすぐ新米が出回る

地域に出かけると「うちの米はうまいんや」とよく聞きます。大学院時代に米の研究をしていた友人はマスクテストをすると「味はそんなに変わらなかった」と言いますが、作り手にも買い手にも特別の誇りと思いがあるのがお米。お米は国民の主食として別格の地位にあります。緊急用に買いだめるだけではなく、日頃でもお米をしっかり食べたいものです。

8月25日も過ぎ、スーパーの棚に1袋の23年度米を見つけました。令和の米騒動は鎮静傾向なのでしょうか。そろそろ新米が出回ります。キッチンに買いだめたお米やパックごはんが溢れているお宅もあるかもしれません。賞味期限が過ぎて廃棄することのないよう、計画的に食べきってくださいね。

プロフィル

湯崎真梨子（ゆざき　まりこ）
和歌山大学食農総合研究教育センター客員教授
元和歌山大学教授、博士（学術）。専門は農村社会学、地域再生学。自らの研究に加え、地域と協働するプロジェクト研究をマネジメントしている。